

- ▶第68回事務職員夏期学校(2・3面)
- ▶2024年度キリスト教学校教育振興助成 助成決定一覧(2面)
- ▶加盟校学生・生徒・児童・教職員数(3面)
- ▶公募(〃)
- ▶第69回東日本小中学校教職員協議会(4面)
- ▶わたしたちの奉仕(立教女学院)(〃)
- ▶キリスト教教育者物語(〃)
- ▶行事予定(〃)

キリスト教学校教育 9

2024・2025年度教研テーマ
 新たな時代におけるキリスト教学校の使命と連帯—いのちの輝きと平和を求めて—

(一社)キリスト教学校教育同盟
 〒169-0051
 東京都新宿区西早稲田2-3-18
 日本キリスト教会館72号室
 電話 03(6233)8225
 F A X 03(6233)8226
 理事長 西原 廉太
 編集人 田村 浩一
 頒価200円(加盟法人の購読料は会費に含まれています)
 (毎月1回15日発行)

開会礼拝



キャンプファイヤー



3日目朝礼拝



第68回事務職員夏期学校
清里・清泉寮で開催されました
テーマ「キリスト教学校で事務職員として働くとは？」

第68回を迎えた事務職員夏期学校が7月20日(土)〜22日(月)、山梨県北杜市の清泉寮にて開催されました。昨年とは会場を変更したこともあり、参加者数の減少が懸念されましたが、昨年以上の全国35法人より92名および実行委員9名の計101名が参加しました。会場の清泉寮は、富士山が見える標高1400mの高原にあり、自然豊かな場所であるため、プログラム構成も全体的にゆったりとした内容にし、同じキリスト教学校で働く参加者同士の交流も深め合えるよう自由時間を長く設け、自然の恵みに触れるアクティビティにも参加できるようにしました。

今年の夏期学校は、校長に安藤理恵子氏(玉川聖学院学院長)を迎え、講師陣には松谷信司氏(キリスト新聞社社長・編集長)、五十嵐成見氏(東京女子大学准教授・牧師)にお引き受けいただき、そして特別講演には、塩谷達也・美和夫妻(ゴスペルシンガー)をお招きしました。安藤校長からは「言葉にして伝えることの大切さ、またこの夏期学校での出会いが『一期一会』であり、今回の出会いを大切にしたい」とのメッセージをいただきました。夏期学校がスタートしました。

まずは、グループに分かれ、アイスブレイクを通して親睦を深める時間を設けました。参加者の表情やその後の話し合いの様子から効果的であったと感じています。主日礼拝では初めての試みとして、近年広まっているコンテンツポラリィ形式での礼拝を取り入れ、リードギターにあわせてワウシッポングを賛美し、神様への祈りを捧げました。一般的な厳かな雰囲気の新たなスタイルを体験することができ、参加者から

「私も自校に取り入れたい」との声が多く聞かれ、印象的だったようです。また、松谷氏による主日特別講演でのソウルフルな歌声は時に聞き入り、また全員でゴスペルソングを賛美することで伝わる聖書のメッセージに心が揺さぶられました。夜のキャンプファイヤーのひと時、火を囲みながら伝えられた五十嵐氏の「いのち」についてのメッセージは、パチパチと木が燃える音と炎の灯りだけの空間の中、自分

未来を担う事務職員に期待!

事務職員夏期学校 校長 安藤 理恵子



校長の任を果たすために初めて訪れた事務職員夏期学校。こんなに豊かに愛と工夫が凝らされているとは思いませんでした。若い世代を中心に、全国から集まった事務職員たちは、自校のスクールモットーを分かち合っているスピリットを体感することができたと思います。五十嵐成見牧師のメッセージは、人間の弱さを等身大のリアリティで語り、キリスト教学校が担うべき世界線を明確に示す聞き応えのあるもの。松谷信司さんの経験とデータに裏打ちされた的確な言葉による講演には、ディスられても尚心地よい真実がありました。賛美の心を様々な形で示してくれた塩谷達也さん、美和さんご夫妻は、福音が人を自由にする力を持つという説得力を体現していました。日曜の朝の礼拝では、ワーシッポングを青山学院のチームがリードし、礼拝が初めての参加者にとってもキリスト教会への敷居を下

げてくれるような、新鮮で豊かなときとなりました。特筆すべきは、準備委員の方々の徹底した仕える姿勢です。それも明るく楽しく、不測の事態にも柔軟に対応していく姿に、ここにこそキリスト教学校の実があるように感じました。このような研修は参加者が多くの学びを受けることが目的であることはもちろんですが、準備の働きを担う者たちも、そのプロセスを通して他校や全国に視野を広げ、愛されることと愛することを体感していくことが、同盟の次世代育成のための重要な部分であると思いました。コロナ禍以降はオンライン研修がより多数の人々をつなげる安価な手段となっていますが、対面で空気を共にする双方向的体験が人格に与える影響力の豊かさを大切にすることを、私たちは特に若い働き手のために堅持していく必要があります。

各校とも日々増幅する校務や広報活動などで汲々としている状況ではありますが、未来を担う人と共に歩むために、本当に大切なことのためにお金と時間を勇気を持って投資し続ける信念が問われているとも思っています。そんな各法人の未来への思いに十分に込められている事務職員夏期学校でした。参加者の各校での働きと歩みのために祈ります。

〈玉川聖学院学院長、教育同盟理事〉

自身に置き換え深く考えを打たれました。この機会に全国から集められた参加者の皆さんが、一期一会の出会いと夏期学校で感じてくださった日々のタツツの皆様に感謝申し上げます。永石美穂(鎮西学院総務課)



清里から遠く南東に望む富士山



会場周辺は高原の花々が満開

事務職員夏期学校 3日目朝礼拝説教

キリスト教学校としての世界線を伝えていこう

聖書: コリントの信徒への手紙二 4章18節

牧師 五十嵐 成見



私たちは、これまであまりにも多くの事柄において、目に見えるものによって人間の価値を値踏みし、逆に値踏みされるような世界に染まってきているのではないのでしょうか。ひと昔前に流行った受験戦争、という言い方が、人間の価値を成果や成績で安易に判断するような価値観を助長してきたのは紛れもない事実でしょう。以前、進学塾の若い講師が「〇〇大に入れない奴はクズだ」と発言する動画を目にしたことがあり、背筋の凍る思いがしました。このような言動は、合格者には他者を見下す傲慢な心を、不合格者には拭い難い自己否定感を植え付けることなのでしょう。こんな価値観が私たちの社会を形成し、また、そういう見方をして恥じることのない人々がいるのも事実です。しかし、他ならぬ私たち自身もまた、目に見えるもの—成果、形相、容姿、所属、所有物—で人間の価値を値踏みしやすい心の誘惑に常に晒されています。

キリスト教学校もまた、生き残りをかけて、偏差値を上げたり、名を上げたりすることに躍起にならざるを得ないのでしょう。そのような努力を決して否定するわけではありません。しかしそれ以上に、キリスト教学校の果たすべき使命があります。それは、目に見えるもので人間存在の価値を決して値踏みしないという、目に見える世界の価値観とは異なる明確な「世界線」を提供し続けることです。成績や成果が人間存在の価値そのものを決めて計るものではないのだ、という強い信念を学生たちに対して、また教職員同士で、持ち続けなければなりません。それは、「私たちは見えるものではなく、見えないものに目を注ぐ」という聖書の言葉に基づいたものです。神さまは「建学の精神」によって証しする目に見えない神さまは、私たちを目に見えるもので決して値踏みされない方です。目に見えない神が、目に見えるどんな人間よりも、あなたを愛している、重んじている、尊んでいる。その世界線としての福音を、学生に伝えていく。そのためのサポートの役割を皆さんは与えられているのではないのでしょうか。この世界線としての福音を学生と共有し、また私たち自身も生きていくことが、キリスト教学校の使命であり、存在意義です。

〈東京女子大学准教授〉

事務職員夏期学校 主題講演

「キリスト教学校に 多様な事務職員が 不可欠な理由」

キリスト新聞社 代表取締役社長 松谷 信司



事前アンケートの結果によると、参加者の約7割が各校からの業務命令で、自分の意志とは関係なく参加したという事務職員夏期学校。個人的には2018年、19年以來5年ぶり3回目となる参加でしたが、毎度のように最終日に得られる充足感に引き換え、無味乾燥なプロモーションで、モチベーションが低いまま参加者が集まらざるを得ない現実とはとても残念に思います。学期末の多忙さを押し、日常の雑務から離れ、わざわざ山梨の奥地に3日間こもるわけですから、当然、相応の収穫が期待されて然るべきです。

「キリスト教学校で事務職員として働くとは？」という毎年代わり映えのしない主題で、自主的・能動的に参加したいと思う職員は稀でしょう。そもそも、仕事の一環として義務づけられた「研修」で講演の中身などには何の期待もないのかもしれません。その予想

を良い意味で裏切り、「聞いてよかった」「参加してよかった」と思っても、私たちが講師に与えられた最重要任務だと肝に銘じて臨みました。参加した事務職員の8割以上がノンクリスチャン。約3割は、就職するまでキリスト教に一切の接点が無かったという中で、まずはキリスト教について抱いていたイメージを聞きながら、それが就職してどう変わったかについて意見を聞きまし

た。自身がキリスト教学校の出身という方々は概ねイメージ通りという答えが多く、また「排他的で他宗教を受け入れない」「神聖で近寄りづらい」「真面目で堅苦しい」というネガティブなイメージを持っていただけ

に「寛容で信仰や礼拝を強要されない」「初心者にも広く門戸が開かれている」などの反応が見られました。一方で、「思ったよりキリスト教色が薄い」「クリスチャンの教職員、学生が少ない」「仕事上、お祈りや賛美歌に触れる機会がない」といった意見もありました。同じキリスト教

学校で勤務する意味、保護者でも教員でもない事務職員の存在意義は決して小さくありません。クリスチャンもノンクリスチャンも、教員も事務職員も対等に協働できる職場環境、そして立場がどうあれ「置かれた場所」を省みつつ、応対する学生、業者、保護者らに寄り添った「他者の靴を履く」訓練と、本音を共有できる信頼関係を築くことが重要でしょう。

3日目の全体会では、参加者の中から「ひな壇ゲスト」を迎え「アミーゴ」を企画しました。この際、クリスチャンとノンクリスチャン双方の本音を聞く

「キリスト教学校として魅力が高めるために」 「キリスト教学校とは」 掲げる建学の精神が形骸化し、有名無実と化しがちな中、「ガチ勢」にはない発想や対応、「伝統」や「奉仕」といった言葉で誤魔化されない事務職員の存在が、より多様な豊かな教育の補償に、ひいてはキリスト教のイメージアップや敷居を下げることに貢献するはず

今回、諸事情によって参加が叶わなかった事務職員の皆さんにも、同様の「学び」を得られる機会が保障されることを願ってやみません。

「愛を伝えるのにふさわしくない日はない」 ミッションスクールや教会は愛を伝え続ける場であるという想いをこめて。

「研修」で講演の中身などには何の期待もないのかもしれません。その予想

「研修」で講演の中身などには何の期待もないのかもしれません。その予想

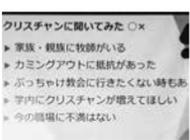
「研修」で講演の中身などには何の期待もないのかもしれません。その予想

「研修」で講演の中身などには何の期待もないのかもしれません。その予想

「研修」で講演の中身などには何の期待もないのかもしれません。その予想



清泉寮新館ホールにて



クリスチャンとノンクリスチャン双方の本音を聞く



クリスチャンとノンクリスチャン双方の本音を聞く

特別講演 ゴスペルシンガー 塩谷達也・美和

ゴスペルコンサート(賛美と証)

* You set me free 達也氏が渡米して日本にはなかった自由さを感じたこと、神の愛を知った時にはそれ以上の自由を得たことを語りながら。

* Amazing grace my chains are gone "Amazing grace" 作曲の背景、本当の自由を与え人を変える神の愛を語る。歌は「神を知り鎖から解かれた」歌詞とアレンジを加えて。

* ストレイシープ 「さまよう羊を神は愛してくださる」と、ゴスペル授業で出会った悩む学生との関わりの体験から。この曲には全員がコーラスで参加した。

* 慕い求めます 生きている目標がわからない中、ゴスペル/教会で「愛」というワードに囲まれ、新しい道を示された美和氏の経験より。

* Deep Sea~海よりも深く~ 学生との橋渡しの役割も持つ「職員」という立場に、神さまが皆さんを呼ばれた。自分が逃げてもなお抱きしめて下さる「深い神の愛」を歌う。

* O happy day 映画「天使にラブソングを2」より。参加者もコール&レスポンスやゴスペルの楽しさを体験。夜のキャンプファイヤーでも全員で賛美した。

* 愛を伝えよう 「愛を伝えるのにふさわしくない日はない」 ミッションスクールや教会は愛を伝え続ける場であるという想いをこめて。

◇塩谷夫妻は、礼拝や祈りの時、キャンプファイヤー、閉校式など、様々な場面で賛美しました。

メッセージ



塩谷達也・美和

将来のキリスト教学校を支えていくであろう若い職員の方々に、様々なスタイルの賛美の歌を聞いていただけたこと、また、聞いていただくだけではな

第69回 東日本小学校教職員協議会

6月15日(土)、聖学時代に記されている「誘惑を院小学校にて、「新たな受けるキリストの姿」と、ヤコブの手紙に記されている「神に近づきなちのかがやきと平和を求め、近づいてください。」というメッセージが、折れる学校に勤め



山口博氏

開会礼拝では、「礼拝する学校」をテーマに、学校法人聖学院の山口博院長より説教がありました。マタイによる福音書



聖学院小学校の児童たちによる礼拝奉仕



聖学院小学校の児童たちによる礼拝奉仕

その後、コロナ禍の期間を振り返り、学校の先生方による歌とダンスの発表がありました。



公開授業(5年生)



授業振り返りの時間

小学校)より挨拶があった。深く伝わってきた。南山大学名誉教授の石田裕久先生による「感謝を育む協同の学び」をテーマにした講演となり、互いに認め、励まし、高め合う学校づくりについて学ぶことができました。貴重な資料の中から、社会も学習も、まわりの仲間との助け合いからつくられることが

整うと、奉仕者全員で歌い、お祈りしてから配布します。コロナ禍以前は、毎週の炊き込みご飯でしたが、現在は炊き込みご飯の他、月に数回、パン、クラッカー、魚肉ソーセージ、マスク、ティッシュ、時に塩や飲料水、カイロや手編み帽子となっています。生徒はパック詰めと配布の他に、セット準備や地域清掃をきめ細かなレクチャーと共に作業し、振り返りをした後、主日礼拝に参加しています。

生徒は最初、緊張して人と顔を合わせて声を出すことに躊躇することが多いのですが、教会メンバーの支えにより自ら挨拶や声かけができるようになり、リピーターとなって手伝いたいと申し出てくれます。ま



地域の清掃に参加する(後方は隅田川にかかる厩橋)

た、この活動から、社会には様々な歪みによって食べることが困難な人たちがいるという現実、食事の有り難さ、いのちの尊さを知ります。何不自由なく生活してきた生徒たちは、炊き込みご飯250gを1時間近く歩いて取りに来られることを目の当たりにして、ようやく自分にできることは何か探し始めるのです。

また、教会との関わりが大変重要で、メンバーから教会や地域のこと、学校や社会のあり方、活動背景と今の状況などの話を聞き、大切な学びとなっています。10年前は50~80代の男性が多かったのですが、近年、性別や世代を超えて、体が不自由で病気をもち人たちが多くなりました。職や住まい、家族を失った人たちが加えて、生きにくさを感じる人たちが多くなったと考えます。生徒たちにはこの出会いと交わりから、イエス様が手渡された食事を思い起こし、日々成長していくことを心から願っています。

大内麻理 宗教部長

立教女学院中学校・高等学校

わたしたちの奉仕活動

浅草聖ヨハネ教会日曜給食活動 一手渡しする食事 立教女学院中学校ボランティアグループ

明治期の教頭石井亮一は、濃尾大地震(1891年)で多数の孤児が発生した際、少女たちの人身売買被害に心を痛め、職を辞して孤女学院を開設、日本初の知的障がい者施設「滝乃川学園」を創設しました。後に関東大震災で本校の築地校舎が消失した際も、滝乃川学園の一部を仮校舎として提供、被災1ヶ月余り本校の授業が再開できました。これらの思いを引き継いで本校の奉仕活動は続いています。

1990年代は、高齢者や障がい者施設の他に乳児院、修道院で活動していましたが、時代の変化に伴って中学生を送ることが難しくなり、当時のチャプレンから日曜給食を紹介されました。関係校の高校生が先に活動を始めていましたが、「小学校を卒業したばかりの中学生が、生活で困難を抱えた方々に炊き出しの食事を手渡すこと」について、教会が慎重に協議した結果、中学生も彼らを励ますことができるのではないかと、との判断で2013年度から活動に加わっています。

月に一度の日曜給食活動は、定例会で募集、保護者の了承のもとで決定し、毎回2~8名が教会最寄駅に7時40分に集合します。すぐに炊き込みご飯をパックに詰め、約100食の準備が



配付物品を準備



教会の方々と作業

事務局だより

初めから終わりまで、手厚いもてなしの上に、授業まで公開していただいた会場校の聖学院小学校教職員の皆様、保護者の方々に、心から感謝申し上げます。お土産で頂戴した「みつばちプロジェクト」の「ジンジャーエール」も、とても美味しくいただきました。誠にありがとうございました。ごい

中村俊英

立教小学校教諭

太平洋戦争後の人心混乱の中、河内長野教会に集う子供たちが「聖書に基づく学びの」できる、自分たちの学校が欲しい」と熱心に祈ったのが、清教学園の始まりです。そして、その思いにこたえ、教会で祈りを共にしていた植田真一と中山昇の二人が神様からの召命を受け、清教学園の創立とその教育活動に人生を捧げる道を選びました。



生徒たちと談笑する植田先生

線・在来線は運転中止。2日目が終了、解散直後のことでした。南海トラフ地震臨時情報、特別な注意の呼びかけは一週間続きました。観光や交通、災害備蓄品に影響が出ています。直下型地震を含め、いつ、どこで、という予想は出来ません。家族や学校、職場で改める必要な準備と心構えの契機したいと思います。事務局局長

Table with 2 columns: Date and Event Name. Includes events like '第10回全国事務局長・事務長会議' and '第68回大学部会研究集会'.

植田と中山は、「神を愛し、人を愛し、而も真理を追求して知性を高める真の基督精神の道場たる、生きたる学校を作る」という使命を胸に、1951年、開校の夢を叶えさせていただく恵みに与りました。全校生徒わずか49名の小さな出発でしたが、清教学園は神様の臨在を

生徒たちと談笑する植田先生



「後世への最大遺物」の授業を行う中山先生



植田野稔 清教学園 理事・法人事務局長

祈るほかに道はあらず

植田 真一 (1896~1989)
中山 昇 (1925~2019)
清教学園

覚える喜びの場所でした。南大阪の田舎に位置するた、易しくはない運営の連続でしたが、植田も中山も「祈るほかに道はあらず」と思い到り思い返してまた祈るかな」といふ白石瀧村(どうそん)牧師の句を口癖にしなが、約40年にわたり、皆と共に仕

植田野稔